

「^{ひと}人間」と「^{いのち}生命」の間

—— 大田堯先生インタビュー ——

聞き手 西 平 直

1、子どもの頃・遊び場・驚き心

西平：よろしくお願ひいたします。お伺ひしてみたい事はたくさんあるのですが、まず、子どもの頃のことなんです。どんな風に遊んでおられたのか、どんな記憶がございますか。

大田：そうですね、本郷町という、小さな農村の交易集落として発達した町がありまして、その町がいまは私の郷里です。高い山の上に広島空港があります。少年時代、いつも仰ぎ見ていた山で、それは西側にありましたので、太陽はあそこで眠るのだと思っていました。そういう風景のところへ、空港が突如できました。ですから本郷町は今や空港の町であるということになりましたが、ただ空港があるというだけで、皆通過点ですから、町は非常に寂れているんです。

今、子ども図書館をやっているんです。山陽在来本線、本郷駅の前が家内の実家でしてね。私は隣村の船木村という村に生まれたんですけど。家内は亡くなりましてね、4年前。その家内と前から話していたんですが、あそこは不労所得の土地だから公共に返そうということで、絵本図書館というアイデアになったんです。

私は隣村だったわけですが、今は合併して本郷町ですが、村に育つというわけです。大変田舎ですよ。沼田川という大きな川が流れていまして、川のすぐ傍に学校がありました。学校っていうのは大体、村の中の僻地に置かれるんです。いいところは田畑にしなきゃならないから。部落の近くにはできるよりも、部落からちょっと離れてできる、これはアフリカなんかでもそうですね。で、僕の主戦場といたらおかしいけれども、遊びの場っていうのは、その大川の川原だったですよ。川原というのは、川の真中に洲ができて、灌木も茂って、しかし洪水になるとたちまち水の下に消えるような、それだけに、神秘に満ちたところです。

ある個所は、泳いで渡らなければならない。この泳いで渡るっていうのが、またすばらしく僕の勉強になったんですね。この川の急な流れで、背丈の届かないところを渡るのはね、この感覚はなんともいえないんだね。夏休みになるとその川へ遊びに行くのがもう楽しくて楽しくてしょうがない。胸をどきどきさせて出かけていくわけ。川の最初の水の流れに足をつけた時の感触は、今でも覚えています。その頃は、たいてい群れなして、年の違いのやなんかと一緒に渡りますからね。それで二手に分かれて、水雷ごっこかといってゲームをやったり。当時は、戦争の状態だったから、兵隊ごっこをやるとか、占領しあうとか、そういうことをやりました。そこで育ったのが、一番僕の中に残ったものなんじゃないでしょうかね。だから、学校っていう印象もあるけれど、学校よりもやっぱりそこでいろいろ戦略を練ったり、けんかもしたり、今もう町長になった人と。僕より二級上だったけれども、僕、小さかったけれども、背伸びして叩いたり、ひっかきむしったりね(笑)。けんかしたり、仲直りしたり。そういう中で付き合い関係の手心がわかるんですかね。それに驚くものがいっぱいあるから。いろんな魚が現れてきますしね。うなぎの穴釣りといひましてね。とれもしないんだよ、我々みたいなちびっこには(笑)、でも、細い竹の先の針にみみずをつけてこう入れるわけなんですよ。それから、山へ蜂の子をとりに行くとかね。

西：ひとりで遊んでいたという記憶はないんですか。

大：ひとりでいたのは、シジュウカラを捕るときくらいかな。下が網になっている筈^{ざる}みたいなものを、斜めにして、そこに棒を立てといてね、ずうっと紐をひっぱっとくんだよ、中へ餌を入れて。入った時にパッとひっぱると、ぱたんと落ちるという、極めて単純な構造なんだけどね。それがまた学校から帰って、ひょっとして掛かっちゃいないか楽しみなんですよ。そんなのはひとりでやったね。でも大抵はそ

こらに仲間がいてね。そういう意味じゃ、多様な人間関係をその時すでに経験しているということですね。

西：野球で遊ぶとかいうのはまだないですね。

大：そんな上等なものはないですよ（笑）。ボールだって糸を巻きつけてつくとかね。その代わり、道路でも遊べたし、滅多に自動車なんて通らないからね。そういう意味ではいたるところ遊び場あり、どこでも遊べる、非常に豊かな社会でした、子どもにとっては。今の子どもに比べると、比較にならないほど豊かな社会ですねえ。

西：そうした原風景は、いつ頃まで、日本の中に残っていましたか。

大：これは地域によっても違うでしょうが、だいたい1960年代でしょう。つまり、高度経済成長がはいっていく時期。その頃までは、農繁休暇というのがあったんですよ。農業の忙しい時に、学校は休みになるわけです。そして大きい生徒はうちの仕事を助ける。その農繁休暇というのがなくなったのが、だいたいその頃です。これも地域によってまちまちですけども。農業が近代化することもある関係あるでしょうね。そのころまでは、子どもは労働力の一部になっていましたからね。手伝いすることはいっぱいありました。僕は小地主だったから、割合のんびりしてたほうだと思うけれど、本当に村の子どもたちはよく働いてました。ある意味では、出番を持っていたということですね。あてにもされていた。今はもう、子どもは労働のあてにはされていないと思うけれども、その頃はそういうことがありましたね。

いろんなものにふれて、センスオブワンダーとか、驚き心とか、あるいは仲間と分かち合う心とか、そういう人間という動物にとっての基本的な部分をね、大体子どもの時の遊びのなかで体験するんだと思うんです。学校はあんまりセンスオブワンダーを育てないしね。それから人間関係も、なんていうか非常に硬直化してるでしょう。型にはまって。校外でのけんか仲間とか、その友人関係の方が、はるかに人間らしい経験じゃなかったかと思うんですね。

夢中になって遊ぶということが、今から考えると、人にとってそうとう奥行きのある深い経験につながっていくと思うんです。非常に大事な体験に。85、6になってもその遊び心を失いたくない、夢中になって何かをするとかね、そういうことは失いたくないと

思いますね。しかし、大人になると段々雑事が増えてね。何のためになどという目的をもって、手段として自分を動かすというようなことが多いでしょ。

2、父親・中学・大阪

西：先生のお父様は、どういう方だったんですか。

大：僕の親父っていうのは、大きな筋では農民ですよ。小地主ということで、農民なんですが、よく動き回る人物でしてね。勉強もさせてもらったらしくて、伝説ですから間違ってるかもわからんけど、海軍兵学校を受けて落第した。それで東京物理学校へ入った。入るのは易しいんです、東京物理学校ってのは。出るのが難しい。入るのは入ったらしくすけど、出た証拠は何もない（笑）。それで、帰ってきて、人の世話がたいへん好きで、郡会議員をやる。まあ、村のオピニオンリーダーじゃないですか。相談相手にもなるとか、そういうタイプのね、非常に活動的な人物です。隣の三原町にあった会社に株を持っていて、それが1929年、昭和4年に倒産し、それと同時に、我が家も倒産してしまう。僕が12歳、小学校6年生の時、スットコトンになって、大阪の裏長屋に住むんです。当時、姉や兄が大阪で教員やっていましたのでね。だから、中学は大阪の中学ですよ、僕は。

西：そうですか。知りませんでした。

大：大阪の、八尾中学といましてね、昔は府立第三尋常中学でした。すぐ近くに天王寺中学といういい中学がありまして、たくさんの秀才が出ていところですけど、そこは田舎から来るのは難しいだろうと兄貴がいうので、八尾中学に変えたらしいです。そこに5年間いまして。大阪での生活は裏長屋に近い生活で、それはひとつの貴重な経験になりました。

家計の助けになったわけではないけれど、中学生の頃から会社の社長の子どもの家庭教師をやりましたね。中学五年で終わって、海軍兵学校ではなくて、海軍経理学校を受けるという気持ちになります。当時軍国少年ですから、みんな。もしそこに行っていたら、中曽根さんと一緒になったかもしれないんです。彼ちょっと経理学校に行くんですね（笑）。でも、目で失敗しました。近眼の度合いが回復しなくて、結果において一年浪人生活をしたんです。そして、広島に親戚がありますし、広島高等学校へ進むんです。

3、旧制高校・教育学

西：広島高等学校で、長田新先生のペスタロッチの『夕べ』を聴講なさったということですか。

大：そうです。ペスタロッチの『夕べ』。あれはペスタロッチの誕生日になるのかな、長田さんの記念講演が一年に一回あるんです。二回とも出しましたが、それは文理科大学でおこなわれました。

西：それは、先生が教育学を選ばれてゆく布石になるんですか。

大：そうですね、それはやっぱり布石になったと思います。でもいよいよ最後の選択は高校の3年の選択です。それまでは自由にいろんなものを読みふけりますでしょ、旧制高校は。学校さぼっても読むんですから。それこそ雑学ですが。カントを読んでおかないと何も語れない、何にもわかってないのに(笑)。こなれない言葉をわざわざ使って話し合うという時代ですね。そんな中で、どこへ進むかという問題になったんです。僕はとにかくマネーの問題は関心がない、経済の方には全然関心ない。それから法律はいやなんです、いろいろ条項があったりするの。無難なのは文学部だ。しかしその文学部で飯が喰えるか、小説や作品で喰えるわけではない。そこであがってきた候補が、社会学と心理学と教育学の3つです。親友のひとりがいまして、これは戦死しましたけれどもね、非常に優れた、小説も書き作曲もするという類稀な人物でした。僕は非常に親しくしてまして、その彼が心理学へ行くから、お前が心理学に行くなら俺は教育学にしようと、社会学とだいぶ悩んだんですけど。兄貴達も教師やってるでしょ。それから、おじいちゃんが寺子屋の師匠やってたとか、なんか教育的な雰囲気なんですよ、家庭がね。教育関係の雰囲気が強かったせいか、そっちを選んじゃったということですよ。

結果から見ると、間違っただけでした。教育に対する認識が間違っていたんですよ。たとえば、教えて立派な人にするとか、教えることによって立派な人間をたくさん育て、世の中が良くなるというような、それが社会改革だというような、実に甘い考え方というのがあったんですよ。そういう教育の捉えかたが間違いだというのは、すぐわかる。しかし、それを修正するには何十年もかかるわけです。今でもまだ、教えたがるというところがあって、教育か

らなかなか抜け出せない。教育の誘惑というのは強いんです、この社会は。すぐに教えることで、問題を解決しようとする。問題がおこると教育が悪いというのも同じですね。そういう教育観に期待をもったのが、間違いの選択だった。でも遅いです。だから歪みを解いていくための努力がずっと続くんですよ。村に入っていくのも、それですからね。結局、歪みをとるために若者達に触れさせてもらったんです。「ロハ台」の始まりはそれですね。

4、戦争体験・元の木阿弥・「地域教育計画」

でも、それには、もっと深刻な経験があるんです。戦争体験です。

『いのちの絆』にも書きましたが、私たちは兵隊として南方最前線にいました。兵隊として。将校になることを忌避しましたので、試験は受けた振りをしてしまったけれど。士官になるなんてことには全然意欲はなかったです。内地に2年いて、あと4年間いましたが、後の2年を前線で過ごします。途中でセルベス島という、今は、セラウエシ島っていうのかな、名前が変わりましたが。インドネシア共和国の、ニューギニアに近いところですから、もう最前線もいいところですよ。そこへゆく途中に、アメリカの潜水艦によって魚雷を受けて、兵員、兵器を満載していた輸送船が撃沈されました。ちょうど僕は、後ろの方の船倉にいて。貨物船ですから、お蚕を飼う時のような棚にみんな詰め込まれているわけです。畳一畳7人の割合でつめこんだと言いますが、甲板に寝るからなんとかなるんです。その船の後ろの方にいたんです。船首に二発の魚雷を受けまして、直撃されたところにいたものは、もちろんみんなやられました。僕らは燃える海の中に飛び込んで、37時間、筏にぶらさがっていました。

まったく裸でセルベス島に上陸しましたので、まったくの原始生活。家づくり、食用の植物を育てるという生活です。僕は召集兵といって、現役ですぐに兵隊に入るんじゃないくて、予備の補充兵だったものですから、年をとられた農民兵の方なんかと一緒にグループの中に組み入れられて、その人たちと一緒に共同生活をやるわけです。そこで僕の存在価値が問われるわけです。農民兵の人たちってのは、水を得た魚のようにいろんな仕事を創造的にやっています。僕はもう単なる傍観者であるしかない

んです。けど同じ兵隊ですから、おまえ何をぼやぼやしてんだ、何もできねえじゃないかと言われる。そういう雰囲気の中で、18年間の教育ってのは一体なんであつたかと問わざるを得なかったわけです。裸にされちゃったわけですから。

もっと深刻だったのは、自分は今、どういう歴史の中での、どういう位置にあるのか、全く見えないんです。何が何だか、分からなくなった。では、今まで小学校で習い中学校で習い高等学校で習い大学で読んだ歴史は、一体何だったんだ。それを痛感したのは、インドネシア人と接触して、彼らの歴史を聞いた時です。昔はどういう状態だったのか。日本語のしゃべれるインテリの人でした、インドネシア人で日本人学校の先生です。350年前といったかな、前まで3人の王者がいた。350年前からオランダがきて政治をはじめた。彼らの歴史はオランダから始まり、それから先は見えない。歴史というものが、我々の学んだ歴史とは違うんです。250年とか、350年前から始まる。では僕たちの学んだ歴史はなんだったか、ますます、気になる。それですっかり自分の受けた教養と教育が怪しくなったわけです。総ざらいさせられたんです。そこはやっぱり、転回点でしょうね、ひとつの大きな。

ところが兵隊から帰ると、また、元の木阿弥ですよ。本郷町へ帰るんです。大阪は爆撃を受けましたから、家族は疎開してしまして、そこへ、敗戦後一年経って帰ってきたんです。そこで母との出会いがあるんですが、僕には非常に印象強いです。もう死んだと思っていた人間が現れたから、びっくりしたわけですよ、母は。洗濯をしていて、僕が帰っているのに、呆然と立ったままなんです。幻だと思ったんでしょうね。しばらくたってから、たかちゃんかあ！と言ってね、からだを寄せたんですけれども。まるで別世界から帰ってきたような。

隣のうちの離れを貸してもらって、そこで、村の小学校の校長さんと接触の機会があって、僕のことはわかっていますので、新教育のことを教えてくれというわけです。僕は、東京の先生とは連絡があるものだから、東京の情報を提供する役割になるんです。そうなるとやはり学校の先生の一部になっちゃって。当時社会科という教科が初めてできるわけです。社会科の「社会」なんて言葉は、だいたい社会主義なんかと同じように考えられていたみたいです。それが教科になるんですから、びっくりたまげたわけ

だ、みんなね（笑）。一体なにを教えたらいいいんだとね。僕は、ソーシャルスタディズのことを、戦前から知っていましたし、コミュニティー・スクールのことも知っていました。1929年のニューディール政策のもとで、コミュニティーのリ・コンストラクションをやるといふ、学校教育の社会との関係の情報をもっていました。だから驚きはしなかったんですけれども、しかし具体的にはどうするか。そして、地域教育計画というのを始めるんです。それが一冊の本になります、『地域教育計画』という。昭和24年くらいじゃないかと思いますが。22年くらいにはもうできていたんです。

5、五十年代・転換期・ロハ台

その次のモメントが、1950年ですね。つまり、朝鮮戦争がはじまる前後に、占領軍の政策全体が大きく変化をする。その時、知識人は非常に大きな岐路に立たされるわけです。国全体の体制が、今までの平和政策を変えていきますから。そして赤の弾圧がものすごくありました。いわゆるレッド・パージです。僕はどの政党とも全く関係なかったけれども。アメリカを解放者としてみていたはずの共産党が、今度は弾圧の対象になるという大転換が起こるわけです。ただ共産党だけではなくて、知識人全体が試練に直面するわけです。どちらの方向を選択するかという、岐路に立つわけです。1950年という大きく政策が変わるときに、初心に返るといふか、戦争直後に生きた平和への考え方というものの系譜をずっと守っていくのか、それとも、再軍備の方向へいくのかという、大きな判断を迫られるわけです。その選択の中で、僕ら戦争体験をした人間としては、やっぱり平和の問題に固守するところがありました。そして、平和への固守という選択をすると、結局、反政府的にならざるをえないわけです。この国の体制とは違うわけですから。

この時期に多くの民間運動が噴出したんです。あの時期をご覧になると、一、二の例外はあるものの民間運動が現れるのは大体50年以後ですよ。教育だけでなくあらゆる分野でおこってくるわけです。その選択の中に教育もあったわけですね。民間運動が復活すると、同時に戦前の弾圧などで苦しんだ人たちもその方へ参加してくることになります。その民間教育運動の中で、僕らは鍛えられるわけです。現

場の厳しい教師達との交流はそこから始まります。その頃の民間運動は非常に厳しいものでして、研究者は一体何を言っているのか俺達にはわかんないって、平気で言いましたよ。自分の学問が怪しくなるわけですよ。

豊かな実践を持った教師達が、戦前の経験も踏まえて、運動を方向づけたと思います。その中の一つが生活綴方の教師達でした。そこで僕などは、その生活綴方の教師の流れに選択を向けたわけです。そうすると、それと戦争中の原体験が結びついちゃうわけです。つまり、教育の作り直しと学問教養の転換が結びつく。だから一時的に元の本阿弥になりかけたのを、今度は生活綴方教師たちが引き戻してくれた。そこで引き戻されて、もういっぺん自分を作り直さなきゃならん。こういう思いで村へ入っていくわけです。

僕はだいたい、やってみないと納得できない。俺も村へ入って実際に若者達と話ができるかやってみると、そう思っ入り込んでいったのが、あの「ロハ台」の仕事なんです。だから、何かを若者に教えるなんて気持ちはないわけです。彼らから、何かをもらわなきゃならん。少なくとも、僕の言うことが通ずる言葉かどうかを試すという、そういう思いで行きました。それでも、農民の歴史をやさしく語れば通ずるかもしれないと、原稿を用意してゆきました。でも全然ダメなんです。その頃は、青年学級という、中学終わった後の補習教育みたいなのが、社会教育として行われていたんです。その村の青年学級に、僕は教師にしてくれ、そこの仲間に入れてくれと、知っている先生を通して、教育委員会に頼んでもらったんです。部落の青年団が中心になって、一、二、三月くらいの農閑期に、夜、学習会をやる。その火曜日を、僕が分担するという事になったわけです。それで僕は農民の歴史ということで何か話をしてみよう、用意していった。そうしたら、集まっている連中、全然そんなことに関心ないんですよ。大学の先生が来るってんで、なんか勉強しようっていう、まじめそうなのが一部いました。でもそこを支配していたのは、7人組ってんですけどね、世間から言えば不良ですよ。中学時代は村の神社の丘に穴を掘って立て籠もって、傍にある木に見張り台を作って、学用品代は焼酎とタバコにかえるという、そういう連中なんですよ。その連中が、夜遊び半分には集まっている。しかも、次、三男が圧倒的に多いん

ですよ。次、三男てのは、皆さんには分からないと思うけれど、当時の農村は長男主義で、次、三男は家に居所のない連中なんですよ。雨が降っても風が吹いてもやってきましたよ。とにかく集まって“おだ”をあげるのが目的なんだから。そこで僕が農民の歴史を胸に入れて行っても、全然、無関心ですよ。「太平洋の鷲」とかい映画を見た男がいてね、その七人組のひとりが。その戦争の様子を手まね足真似でするわけですよ。そのうちに、どんな女と結婚するかなんていう、もうセクハラまがいのことを平気でやるわけですよ。こっちはもうひたすら愛想笑いするだけでね、対話の仕様がなくて、諦めちゃったんですよ。

うちに帰って、これはえらいことになった、どうにもならないと思って。ところがそのとき思いついたのがね、まず名前を覚えることだったんです。十数人だったけどね、「よっちゃん」「かずさん」「ひろさん」という、その名前をチェックしておいた。よっちゃんがこういう話をした、そしたら、きよさんが、そうだそうだと云ったとかね、話合いの記録を作ったんですよ。ガリ版に切りましてね、当時ガリ版しかないですから。そしてガリ版刷りをもっていくんです。次の火曜日です、土砂降りの日で、よく覚えている。みんないつものように“おだ”をあげている、その前に、一枚一枚、今日は土産をもってきたよとね、また愛想笑いだな、ひとりひとりに渡すわけですよ。でも全然関心なしです。後で聞いたら、あれは役場が協同組合の通知だと思ったってんですよ。それで、せっかく持ってきたんだからってんで、読み始めたらね、「せんちゃん」とか「きよさん」とか、名前が出たじゃないですか。そんなことされたことのない連中ですよ、学校では。そこで、みんなパァーっと注目しちゃった。俺はこんなこと言わなかったとかね、こう言ったのになぜ書いてくれないとかね、いろいろ出る。そこで修正版を作ることになった。そんなことを、100回やりました。100回繰り返しましたよ。

いろいろなドラマがありました。必ず酔っ払ってくるのがいましてね、その時に本音がでるんです。たとえば、俺はドカタだ、だけど俺は人間だ、久保山さんは（ビキニの犠牲者ですけど）かわいそうだ、というようなことを、怒鳴りまくるんです。僕はそれを覚えておいて、これは「ひろさん」の詩だって言ったんですよ。詩のような形にして、次の時に出

すんです。そうするとそんな詩をつくったか、俺もつくるべ、なんてのがでてきて。初めは幼い童謡調からはじまって、だんだん自己表現を始めるようになるんです。僕はもっぱらのサービス業ですよ、その表現を出すように。それを続けていくうちに、僕自身の表現の仕方いろいろ訂正されましたし、わかりやすく言わなきゃなりませんね、だから僕が書いたりしゃべったりするのが多少わかりやすい部分があるとすれば、それはそこで学んだことですね。ひとつの生活綴方です。

ちょうどその同じ頃、鶴見和子さんが、四日市の女工さんの生活の記録をつくっていました。鶴見さんと僕は、日教組の教研大会の同じ講師として仕事しましてね、彼女もやはり自分が変わらなくちゃいかんと思ったんですね。そういう時期だったんです、1950年の時期ってのは。知識階級が自分の位置を自分で改造するといふのかな、大げさに言えば。その延長線で、この「先生のお宅の」サークル続いているわけですよ、50年続いている。だからちっとも変わっていないわけです。

西：その頃、既に先生は、東大の教育学部に勤めておられましたね。そうした、ご自分を変えようとなさる先生と、大学の組織のなかで学生達を教えるという立場と、その両立は難しくありませんでしたか。

大：そうですね、その頃は、いっせいに地域調査をしました。それで寝食を共にしましたね。まあ講義はしなくちゃなんないですね、これは当然。しかしゼミは山の中に行ったり、漁村に行ったりして、小学校の裁縫室の畳にごろ寝をしてね、夜1時2時まで討論するわけですよ、学生と一緒に。ゼミはそういうスタイルだったんですから。その時に一緒にいた仲間は、だいたい印象に残っているようですね。山住正己さんは、後に都立大学の総長をやりましたが、彼が第一回の僕のゼミの学生です。彼はしょっちゅう一緒に行きました。村へ行って仕事をしたことがすごく強い影響を与えたと言っていますね。だいたい、その頃の諸君は、みんな懐かしく思い出を語りますね。

村の青年のように、大田さんは俺達の同士だ、仲間だ、というふうな関係にはならなかったけど。大学の中では教師と学生という関係だったと思いますけれども、しかし、わりに親しくした方じゃないかと思います。僕の部屋はしょっちゅう学生諸君出入りしていました。僕のタバコをやめさせたのも、

僕の学生です。僕はタバコをずいぶん吸っていましたから、ヒカリっていう強いタバコをね、胃もこわしました。今日からやめるっていう決意をしましてね、ただし飲みたくなった時にはすぐにでも飲んでほしいと、我慢できるだけやるという程度の、あまり固い決意でなくやめることにしました。つまり自分をだますという方法ですよ。それで三本くらい吸った残りをね、机の中に入れといたんです。ところが、吸いたくなって、何日か後にあけたらね、たばこがないんですよ。そのために僕やめちゃったんです。それをきっかけに、飲まないですんだわけです。10年くらい後になって、その犯人がわかったんです。それが学生でね（笑）、小学館の編集長やったけれども。僕がやりましたと。犯人判明です、君は恩人だ、俺のタバコをやめさせてくれた恩人だって、笑ったもんですけども。僕はその頃胃を壊してビスケットばかり食べていて、学生諸君もみんな知っていた。でもタバコは止めなかった。しかし、ぶつぷりそこでやめました、おかげで。

6、ゼミ・大学闘争・学部長

西：そういう学生との良い関係は、いつ頃まで続くんですか、大学の紛争、闘争といったらいいますか。

大：ええ、闘争がありまして、建前の上で対立という立場になります。僕は学部長になりますから。紛争処理の段階で、紛争起こした執行部がやめて、どうにもならなくなって、若手を学部長にしないと身体がもたないということで、学部長になる年齢が10年若くなったんですよ。僕は49歳で学部長になったわけです。その時に加藤代行がいたでしょう、彼も40代。大内力さんという農業経済の、僕と同年齢ですが、彼は経済学部長になります。その連中是一緒に調査をした連中ですよ。ええ。終戦直後はいろんな学問分野が共同して村を調べるってやりましたから。社会学から人類学から、医学から法律学、経済、僕のような教育ね、みんなで参加して、ひとつの村を集散的に調べるわけですよ。そういう人間関係の中で、執行部でまた再び出会うわけです。

教育学部は、全国から民青がきて建物占拠しちゃったんです。安田講堂などには、例の、山本義隆さんなどが立て籠もるという状態になるわけです。そして教育学部の廊下全部に、全国から集まった民青の諸君が寝起きする。僕は学部長だからマイクを持っ

て、出て行けてやるわけですよ。だって、よその学部で寝起きしているんだから。それに、両方が対立すると、何が起るかかわからないでしょう、だから出て行ってくれと。マイクでやるわけですよ。そうすると、僕が何者か知らないのか、反抗的なこと言うわけですよ。僕の傍に教育学部の民青の諸君がついてきて、いやこの人には言わせとけ、とか何とか言っちゃって（笑）。守ったつもりでしょうね、彼らは。僕の部屋はどうかっていうと、ノンボリの諸君がいっぱいいるんです。民青と対立関係にあるから、安心する場所がないでしょ。それで僕の部屋に寝泊りするんです。そんな状態ですから、もう修羅城ですね。だけどわりと、学生諸君と息があったとか、まあ向こうが合わせてくれたっていうか、僕はそんなに圧力を受けたことはなかったですけど。ただど学生諸君がそういう風に別れ別れになって闘うなどということは、ほんとうに悲しいことでしたね。ほんとうに苦しい思い出ですよ。心痛む思いで、やっぱり今でも傷になっていると思います。その紛争の最中に、ここへもやってきましたよ、学生諸君がね。いろいろ要求をしましたね。ここに来たら、大人しいですけどね。

いろんなことがありました。あれはもう第3次世界大戦ではないかと思うほど。学部長会議も転々として、いろんなところで、毎晩のようにやるわけですよ、うちなんか帰れないですね。そういう日が続きました。しかし、あれによって一体何が残ったのかということになると、やっぱりちょっとむなししい感じがするんですけどねえ。

僕は歴史と民衆を大事にしようと、繰り返し、学生諸君に言ったんだけど。自分達だけが歴史を創っているという、そんな感覚じゃなくて、民衆と歴史を信頼しようという言い方でね。もうちょっと相互に協力し合えるんじゃないかと言ったんですけど、その声は通りませんね。自分達が一挙に歴史をつくるという、そういうのがあったから、一般の庶民がそれにどういう関心を持っているかには無関心でね、無関心っていったら悪いけれど、そういうつながりが切れているんですね、闘争が民衆と。民衆と切れたところでやっている。だから歴史と民衆ってことを言ったんですけど。……まあ、悲しくて暗い時代だったと思います。……こんなこと言っていていいんですか？

7、「その気になる」・自己創出力

西：本当は、もう少し、生命論といいますか、教育と生命の話をうかがう筈でした。たとえば、先生は「その気になる」とか、「やる気を引き出す」ということをお書きになっておられますが、その辺りから。大：エデュケーションは引き出すという意味ですが、では、何を引き出すのか。一体何を引き出すことが教育なのかという時に、僕は「その気だ」と思ったんです。でも「その気」なんていっても、学問の言葉にならないです。僕はそれを匿名の思想といいます、多くの民衆は、「その気」をすごく大事にしていますよ。インテリも、新聞なんかを書く時は使うんだよ、一般大衆に語るときにね。「その気」は、人間というか生物の、ものすごく深いところから出ているというのが僕の判断なんです。

最初に使ったのは附属中学でした。進化論で、なぜ人間は二本足で立って歩くようになったかという問題。調べるといろいろ理屈がでてくるけれども、僕には全然納得がいかない。それで仕方ないから、納得がなかったと言ったんです。

実はあの時、僕ちょっと態度間違えて、そういう問題が出たときにみんなも一緒に考えてくれという風にいえばよかったのに、僕が調べてこようと約束しちゃった。なんか僕が答えなくちゃならないように思い込んでしまっているわけね。教えなきゃならんと。やっぱり変わってないわけ、僕は。それで一週間いろいろ調べたけど、どうも納得できない。そう思った時に、「その気」がでてきた。「その気になったから立った」と、こう言ったわけですよ。自分でもいいかげんと思ったけれども、納得したんだからいいとね（笑）。すると、「あ、人間はその気になったんだ」と立ち上がって言ったやつがいるんですよ。それで、これは相当可能性がある、冗談だけど、そんな思いをしてね。

それから10年後くらいですか、今西錦司さんの『私の進化論』を読んでいたら、その最後に、人は立つべくして立ったと書いてある。あまり違わない（笑）。でも、この立つべくして立ったというのは非常に評判悪いですよ、いわゆる科学の世界では。何のことか分からないとはっきり言ったのは、『免疫の意味論』を書いた多田富雄さんです。僕は、免疫が教育と非常に関係があるって直感的に思っていたんです、だいぶ前から。免疫は外から異物が入って

くるのを排除して、自分を守っていくでしょう、自己をつくっていくじゃないですか、だから必ず、教育と関係あると思っていました。それで、多田富雄さんの書くものを、難しいけど注目して読んでいた。そうしたら、今西さんが立つべくして立ったというが、なんのことかわかんないと書いてあるわけです。やっぱりダメかと思ったわけですね。あの人は非常に厳密に、科学的に追及していく人ですから。ところが読んでいきますとね、最後に、生命の特徴のひとつに「自己創出力」があるわけ。つまり自ら変わる、これが生命の特徴である、そういう力を考えないでは、生命は捉えられないと、そういう結論になるわけですよ。

鶴見和子さんとの対談の中では、象はなんで鼻が長くなったかということについて、環境との関係でいろいろ説明するけれども、そんなもんじゃないと、多田さんが言うんです。そうじゃなくて、あれは偶然に偶然を重ねて、いろんなトライアルの中で、結果としてああったんだ。それは、自己創出力によると。生命のもっている、自らを創りだしていく力によるものだと。結局、多田さんも変わったんですよ。免疫をよく調べていくうちに、遺伝子にも変更がおこることがわかってきた。それで環境との関係が出てくるわけですね、つまりダーウィン流に。環境に適応したものが残ると、環境との関係で言うわけです。だけど、環境に適合する主体があるじゃないか。それが「その気」にならないと、変わらんじゃないか。それを強調したのが今西さんの立場、今西さんは主体的進化論なんです。僕も、それに近いんですよ。

「その気」をずっと深めていくと、生命の自己変化、自己変容の問題になる。機械は自分で変わることはない、作られたとおりですよ。ところが、生物は自分で変化する。桜の木であろうと、豚であろうと、蚤であろうと、みんな自己変容力をもっていますから。その自己変容力が、一番の頼りどころだと思うんです。それを人間に限定して言えば、「その気」にあたるんじゃないか。生き物はみんな、自己創出力を持っている。自分で自分を変える能力は、非常に普遍的能力だと思うんです。人間もその一環ですよ。ですけれど同時に、その変わり方の特性があるわけです。人間は、簡単にいえば、多肢選択型の動物だと思います。つまり、多くの選択肢の中からひとつを選びながら自分をつくっていく。そう

いう能力を発達させている。だから「その気で選ぶ」につながるんです。

でも、単純じゃないのは、「その気」は意識ですが、我々は無意識の中をふわふわして浮いています。だから無意識の問題が残っています。「その気」と無意識はどういう関係にあるのか。ここは、まだまだ解けない問題です。僕は「その気」の底には、必ず無意識があると思う。無意識があるから、「その気」っていう選択が起こる。無意識があるがゆえに、その中からある意識を強調して行動に移す。意識でもあり、無意識でもあるというふうにいえるかもしれないと思うんですよ。そのへん僕のはいい加減です、もっぱら直感力に頼っていますから。ユングとか、いろいろあるでしょうね。

僕は、教育学は、人の生成研究という立場にたつと、他の科学に影響を与えるくらいの成果を出すかもしれないと思うんです。教育は生成そのものを研究している。今やっと、生命科学が自己生成能力とかいうことを問いはじめた。生命科学といえども、つい2、30年前まで、DNAの初期くらいまでは、システムで説明してたわけ、人間のいのちをね。ところが自己生成で動くということは、システムを超えた力をもつということになる。超システムの力をもつことになる。生成の概念を入れると、システムや機械の概念で説明できなくなる。機械的説明を超えるものが生命の特徴だとなるわけです。生命科学は、そこに行き着いてきた。

教育は、いかに教えて人間を変えるかということを考えている限り、他の科学の応用科学にすぎないですよ。だけど、生成という観点で教育の事象を分析していったら、きっと他の科学にもサジェスションを与えるようになるかもしれない。だから、教育学は遅れた科学だけれども、遅れたものの中に、つまり、「みそっかす」の中に、新しいものをひらく芽があるかもしれない。ちょっと夢のような話なんだけれども（笑）。総合的人間科学としての教育学と考えると、遅れた応用科学と思われる学問だけれど、逆に先端をむしろ思考することになるのではないか。でも、僕の研究はね、そこまで行かないですよ。期待はそういうところにあるんですけどね。

8、違うこと・変わること・関わること

西：すごく嬉しい話です。その上で御伺いたいん

ですが、生成と言いますか、変わっていくということとの関係で、競争ということはどうお考えですか。

大：生存競争ですね、進化論でいえば。

西：そうです。でも、たとえば、競争のゆえに、やる気がつぶされてしまうということもあるわけです。大きいえば、いのちの営みにとっての競争の意味を、先生はどうお考えになっておられるかということです。

大：競争はね、副次的な現象だと思うんです。自己創出力というのは、自分が納得して変わることですから。刺激として競争がはたらくとしても、それは刺激の一種にすぎん。競争によって変わることを僕は否定はしませんけどね、でも外的刺激の一種に過ぎないと思います。悪くすると、競争によって自分を見失うことも起こりうる。だって、他と比較するでしょう、競争という時は他者と比較するじゃないですか。それは人間の、いや生命の多様性と矛盾するんですよ。生命は多様を原則にしていますから。こっちへいくのもあれば、あっちへいくのもある。同じコースを競争するは、なんというか、特別な例ですね。人間がつくったんじゃないでしょうか。生命そのものからいえば、多様であることが必要じゃないですか。多様に自分を開いていく、多様に自分を自己生成する、これが本来の姿だと思うんですよ。ところが今、あまりにも人間を束にして扱うから、その束の中での競争がやたらに目に付くわけです。そのために個性を見失う。他者との比較の中で、他者より優れなければというのが目的になったりしますから、自己が見えなくなる。ひとりひとりが多様に生成していくという基本原則を大事にしていかなければと思いますね。

今いろんな病気があるじゃないですか、たとえば、鶏が死ぬとか。あれは、鶏の多様性を人間が破壊しているんですよ、ひとつの囲いの中に入れて。むちゃくちゃですよ、本当には多様に生きなくちゃならんのですよ、鶏諸君も。多様性の本質にもとづいて、自分の欲求にもとづいてやっていくのが、自然の姿ですよ。それを人間がひとつの箱の中に入れるわけでしょ。だから一遍に死んじゃうわけですよ。囲いの中に、非常に不自然な環境で画一化しているんですよ。生命じゃなくて、ものとして扱っている。商品として扱っている。商品だよ。生命の本質への離反じゃないですかね。

どうも、学校がそれに似てきとるんだよね。ひと

つの囲いに入れて子ども達を競争させる。そういう雰囲気は、生命の本質にはそぐわないんじゃないかと、思えてならないですよ。本当は、それぞれがユニークに、同じ囲いの中にも、ユニークに自分を伸ばしていく。あるじゃないですか、SMA Pなんかの歌に。ナンバーワンよりオンリーワン（笑）。なかなかいいこと言っている。ただあの歌詞全体を読んでみてね、ちょっと不足することがあるんですよ。競争原理に対しては非常にいいことってくれたけど。いのちのかかわりの中にあるという原理が、もっと入っている。かかわりの中にあるオンリーワンは孤独ですよ。だから、かかわりの中であって、ユニークであると。それがオンリーワンじゃないですか。いのちのかかわりの中にあるという関係依存性。だから、自己創出力を根っこにおきながら、多様性と、関係性。こういう三つの要件を僕は問うているんです。違うこと、変わること、関わること。そういう論理を立てるのは、実は生命の特徴、あらゆる生き物の特徴だと思うんです、蚤も虱も、全部そうなんだけど、人間だってそうだと思うんですね。やっぱり違うことを認めあわなきゃいけないし、変わることを認め合わなくちゃいけないし、関わることを認めなくちゃいけない。こういう三つの観点を、僕らの生き方のヒント、自然の人間としての生き方のヒントとしたいなあと思っているんです。……やや生命論に近づいているかな。

西：ええ、とても、嬉しいです。

大：いい加減なこと言っているんだから、あまり当てにしないで（笑）。



9、地球環境・「宇宙に対して失礼」

西：先生、最後に、苦しい質問ですが。地球の歴史の中での人間の意味ということですが。ある集まりのときに、中学生だったか、立ち上がって、もしほんとに地球を守ろうと思うなら人間なんかいない方がいい、人間なんかいなかった方がいいという言い方をした子がいて。ある意味では僕の中にもそういう思いがあるんです。多分今の若い子どもたちの中には、そうした意識があるように感じるんです。ある種のニヒリズム、絶望的、やけっぱちとか。自然を守るとか、大切にするというのは散々聞き飽きた、聞き飽きたけれども、大人たちはなんにもやらないじゃないか。それに対して、先生どういうふうにお考えになりますか。

大：そうですね、やっぱり、事実を受け入れること以外ないでしょうね。いなくなってもいいと言っても、いるんですから、僕ら。ここにいますという事実を否定することはできないですよ。いる以上、僕はなんらかの意味をもって、存在していると思います。その意味を探ることが、人間に求められている。人間はどういう存在であつたらいいのか、そのことの意味を端的に問われているのが、今の時代だと思いますね。問題は、人間だけじゃないあらゆる生命を視野に入れた上で、人間はどう生きるか。人間仲間の中でどう生きるかというちっぽけな問題じゃなくてね、生き物という全体の中で自分達はどうか生きるかが問われていると思うんです。でも、確かにそうですね、人間はたいへんな戦争犯罪人だと思います。現状では。でも、生きている限り、僕はその道を探求したいと思いますね。

西：僕は、もう分水嶺を越えてしまったのではないかと感じているんです。つまりもう手遅れではないかと。人間は勝手をしすぎて、もはや、自然の一部ではなくなった。これからはどうやって戻るかの手先でしょうか。先生はどうお考えですか、戻れますかね。

大：僕は、不可測の可能性といたいね。だいたい生き物はそういう存在ですけど、どうなるかわかんないですよ。マンモス象も死滅しましたよ、人類もまた死滅するってことがおこりうるでしょう、当然。人間の知恵よりもっと壮大な、宇宙の知恵があるでしょうから。自然の摂理っていうのが。やがてそれ

が機能するでしょう。

人間はもっと謙虚にならなきゃならないですよ。なれないといっても、ならなくちゃならない（笑）。それは確かだと思うけど、悲観するっていうのは、ちょっと宇宙に対して失礼だと思うんです。ニヒリズムにおちいるのはね。せっかくこの生を与えてくれて、結構楽しんでおきながら、将来死滅するかもしれないなどとね（笑）。生きましようよ、とにかく。僕は生きたいと思う。86になってもまだ生きたいなんて、実際、欲が深くてもう（笑）困ったものだと思うけど。そんな執着はないですけどね、僕はもうやることはこの程度だと思うし、しかし、エンジョイしたいですね、ちょっとでも。よき仲間、ひとりでも多くのよき仲間との出会いの中で、生きたいと思いますね。だから竹内常一さんは僕をロマンティストだと言うんだよ。彼はニヒリストかどうかは知らないけれど。しかしニヒリズムというのは、ちょっと無責任な思想だと思うんです。宇宙に対して無責任。

西：宇宙に対してですか。すごく嬉しいです、この話は。

大：宇宙といい、神といい、自然の摂理といい、いろんな言い方ができるでしょう。人間とあらゆる生き物を超えた存在というものが働いているわけですから、大きな力が。僕なんか、大部分、水でできるんだね。地下水から海から、全部つながっているんだろうね、その中のひと粒だもの。でもその一粒の私の生命も単なる私の私物ではない。重い生命の歴史を担う宇宙という共有物の一部だ。だからそういう謙虚さを取り戻して。それなりに楽しんでいくという、遊び心で……という感じだけど。

10、ヒューマニズム・アーティストの自由・無意識・ゲノム

大：……何か、対話をしましょう、少し。難しい質問しないで下さい、世間話でいいんです（笑）。

吉長：前から気になっていたんですけど、年表で、広島高等学校に在学中、将来の希望の項に「人間になること」と記入されてるのは……

大：偶然でしょうねえ、それは。思いつめて、ということではないように思いますね。

吉：「人間」というものを、その時はどのように考えておられた……

大：ヒューマニズムの影響を受けていたと思うんですよ。ロマン・ローランドとかね、ジャンクリストフなどが、僕の頭の中にあったから。一種のヒューマニズムというやつでしょうね。だから、学部を選ぶ時もね……。とにかく法律や制度はあんまり好かないんです。あんなのはなるべく簡単になる方がいいと思っています、ほんと苦手なんです。それが、この『私たちの教育基本法』を書くんだからねえ（笑）。最初に断ってありますよ、私は法律や制度には馴染まない人間だとね。だから、やっぱり人間のことを書いているんです。「人を人にする」という、教育基本法の「人格の完成」があるでしょ、第一条の教育の目的。人が人になるということが、どうということかという問題。これは講演ですから寝転んでいて読めます（笑）。

西：僕の先輩に大田先生の信奉者が何人もいまして、壁をつくっていましたから、僕にとって先生は近寄りたがい存在でした。

大：特に弟子はいないですから。全然僕は弟子はいないです、弟子関係って、僕があまり好きじゃないんです。

西：でもやっぱり、大田先生を頼って、ずいぶん多くの先輩方が……

大：そうね、一般の方のほうが多いですね、中小企業会の人とか。お母さん達とかね、若いお母さん達とよくつきあいますし。総合的人間学っていう研究会、2、3年前から始まっているんですよ、ご存知不知道ですか。小林直樹さんという法学部の元教授ね、僕と非常に親しいんですけど。僕はもう幹事みたいなことやりたくないって断ったんですけども。小林直樹さんとか、小原秀雄さんという生態学者ね、それから僕が一番親しくしているのは、今泉吉晴さんという生態学者です。シートンを翻訳した。これはすばらしい本ですよ、シートンの伝記です。今泉さんが原典から全部起こして作ったんです。シートンは並の学者じゃありませんね。アメリカ先住民の猟師さんからたくさん学んでいるんです、動物の生態を。……（中略）

……子育てと教育というのは、僕はやっぱりドラマだと思うんです。本質的に芸術、アートだと思います。だから教師はアーティストだ、あるいは親はアーティストだ。だからアートとして教育を考えていくのは、僕は筋じゃないかと思っています。だから、教育の定義となった場合は、アートとして考

えているんですよ。家永裁判でも、アーティストの自由を主張すればよかったですね。学問の自由で闘ったものだから。学問の自由で教科書を守ろうと、検定を排除しようとしたんですけど。学問の自由でやりますとね、大学の先生はいいですが小中高はそうはいきませんよ、っていうのが裁判官の言い方なんです。そういう言い方で退けられちゃった、教科書裁判、負けちゃったんですよ。負けたというか、最後に五つばかり訂正箇所をね、最高裁も指摘しましたが、非常に僕にとって不満足な結果でした。28年付き合ったんです、家永先生とね、亡くなられましたけど。

西：その「アーティストの自由」のことはどこかに書きになられていますか。

大：正面から書いていませんけど、「教育はアート」という文章、これは演劇教育研究会で講演しています。日本演劇教育連盟の全国集会がありまして、その時に話をしています。

（中略）

……まあ、いろいろやってみたってことじゃないか。いろいろやってみないと、なかなか納得いかないという性分ですから。あれをやって失敗し、これをやって失敗し、失敗だらけの歴史だといえればそれまでだと思います。ほんとにうまくいくことはないです。たいてい間違っ、難しい問題ぶつかって、それを乗り越えるのが夢っていうのかな、それで次の夢ができるってことになるじゃないですか。いろんなことがありますよ、図書館の問題でもね、同和部落もありますしね、同和問題は乗り越えなきゃならないですよ。難しいのは、同和の人の考えよりも、一般の人が偏見をもつということ。それが難しいです。苦勞しましたよ。いろんな苦勞がありましたけど、楽しくやっていますけども。……僕ばかりしゃべってる、なんかないですか。感想でもいい……

松尾：唐突になるかもしれないですけども、大学で教育学というか、アカデミックなことをやっている若い人たちに、望むこととか、あったら聞いておきたいんですけど。

大：そうですねえ。一言でいえば、やっぱりやって確かめるというか、納得するとか。そこが必要だと思うんですね。ただ読んだだけとか、聞いただけじゃなくて、やってみて手ごたえを得るという、その積み重ねが人生じゃないかと僕は思っていますけど。ラーニング・バイ・ドゥーイングというのは

デューイですか、なんでもないことのように、たいへんなこと言っていると僕は思いますね。こどもを動かせながら勉強させるとかね、そんなふうに受けとめていたけど、そうじゃなくて、僕自身がラーニング・バイ・ドゥーイングによって自己形成をする。それを言っていたんじゃないか、デューイはね。野見：さっきの「その気」という話と、無意識という話の問題です。精神分析に関心があるんですが、その無意識の問題と、選ぶことという問題と、どうつながるのかというのが、やはり大きい問題なんだなと思いました。それがすごく印象に残りました。

大：選んで行動して、行動するとコンプレックスも残るわけね。無意識の中に蓄積されるだろうし。僕はこのごろ、夜中にトイレにいく時に、夢を見る。ものを忘れたとか、つかもうと思ってもつかめないとか、それから火事場かなんかで急いでものを拾わなくちゃいけない、もっていかなくちゃならないと思うのに自分のものが見えないとかさ。いろんなものが混ざって。そういうことない（笑）？ 夢分析やらにやらんかなと少し思っているから。あなた勉強してよ（笑）。しかし無意識っていう世界を発見したのはたいしたものですよ。フロイトの、やっぱり大きな業績だと思います。普段ちょっと気づかないじゃないですか、無意識の世界ってねえ。

杉原：先生の、生命の自己創出力という話がたいへん興味深かったんですけど、一方で現代、ヒトゲノムを解読する話ありますよね、遺伝子レベルで見たいこうみたいな。こういう流れを、先生はどのようにみているのか……

大：ゲノムまでいったのはものすごい科学的な発見だと思いますが、しかしゲノムの分析だけでは、本当はなににもわからないんじゃないですか。ゲノムがどういうふうに生成するかという、それが今、問題になっていると思うんです。DNAの組み合わせがあって、ノミともシラミとも僕らあんまり変わらないんだとかね、お猿さんとは99%同じっていう。生き物の共通点を見つけたのはものすごい発見だと思うんです。しかし、さっきの話じゃないけれども、そういう認識を踏まえて、なお手ごたえのあるものが出てくるような気がします。やっぱり自己変容力というものは、まだまだ説明しなきゃならない部分が残っていると思うんです。

それぞれの種によって、ユニークなゲノムを持っています。同時に、個体がそれぞれ違っている。だ

けど全体として共通性をもっている。人間は人間としてもっている。カエルはカエルとしてもっている。それでしかも、みんなDNAを共通して持っているというんだから、生き物はうまくできている。多様性と特殊性というものが積み重ねられていく。誰がつくったんだ、ねえ。しかも、そのつくられたものが動いて自分で変化する。0.1~0.2ミリの受精卵から出発して、心臓ができたり、脳ができたりする。誰もこの秘密解くわけにいきませんよ。それは自己創出力だという、今のところそう言うほかない。だけど、それに気づくと気づかないとでは、サイエンスの位置がすっかり変わるんです。分析が主でしたから、今までの科学は。ものを、静態、静かなものとしてとらえていますよ。動くものとしてとらえていない。発生学なんかでも、動態としてとらえるよりも、横断面を切断した形でとらえるということになっている。ところが、そういうシステムでは割り切れない超システムという、そこが非常に面白いところだと思うんですね。「その気」っていうのが、人間の超システムだって、もっていきたいんだけど（笑）。

後世どう考えるか、わかんないけどね。でもその場合でも、匿名の思想としての大衆の言葉を大事にしておくことは、やっぱり大事なことだと思うんでね、わからんなりに問題を残すことになりますから。まあ興味あったら「その気」の研究やってみてください（笑）。あんまり科学者にはむかないかもしれないけど。でも精神分析には関係してくるでしょう。野：実存っていう言葉ありますよね、これに対してはどういう……

大：あれは、マルキシズムなんかに対して、出てきたんじゃないですか。だから人間を全体的に捉えようとしていると思いますけど。自己創出力に関係する部分が含まれていると思うんですね。よくわかんないですね、実存主義は。でも、どちらかっていうと僕なんかは、実存的な考え方をするほうだと思います。カテゴリーから言えば、分析的な科学の考えかたとは違うでしょ。なんでも科学で割り切っていくという、システムとして捉えていくのとは違えますよね。むしろ精神分析に近いでしょう。「精神分析」という言葉が気になるけどね、いかにも科学で精神を解体するやうなところがね。「分析」を抜いてもいい、精神研究でもいいと思うけども。今でも使うんですか、精神分析って。

野：はい、使っています。

大：使うんですか。でも、カウンセラーかなんかは、生のままの言葉を聞き取るということでしょう。何かを暗示するとかじゃなくてね、ありのままの自然を聞き取るという、記述の世界だろうと思うんです。……（中略）

……僕の場合、勉強といっても教えるんじゃないですよ。話し合います。言い方によっては僕がクライアントでね、患者でね、みなさんがカウンセラーで。僕から引き出せるだけ引き出すことをやられて、僕がしゃべっていく。僕はクライアントだって笑ったことがあるけれども、面白い人間関係ですよ。だから僕、勉強になるんです、自分を吐き出すと。吐き出すことによって勉強になる。

西：ぜひまた、その辺りお聞きしたいです。長い時間、ありがとうございました。

大：なんとなく、懐かしい仲間に会ったような気がします。

西：そんなふうに言っていたら、嬉しいです。本当は、もっともっと伺いたいことがありまして、どうしたらいいかな……

吉：発達の問題は、お聞きしないでいいんですか……

西：発達の問題もうかがいたいし、先生、もしかすると、また改めておうかがいしてもよろしいですか。

大：もう言うことなくなくなっちゃったよ（笑）。まあどうぞ、遊びに来てください、雑談で。今日なんてまだ、まとまった話をしている方だけど。

西：やっぱり、第二段を考えたいですね。本当に長い時間ありがとうございました。

（2004年3月31日 大田先生自宅にて）

大田先生を訪ねて

西平 直

大田先生のお宅に伺うという、今回の企画を立ててくれたのは、助手の吉長真子さんである。はじめ「対談」を勧めて下さったが、とんでもない、ともかく話を聴かせていただく「インタビュー」にして正解であった。

実は、先生にお目にかかるのは初めてのことである。今まで一度もお目にかかったことがなかった。以前、大田堯論を書いたときも、当然挨拶に行くべ

きところ、結局そのまま失礼してしまったし、「東京自由大学」の講師として同じ企画に名を連ねたときも、今度こそはと思いながら、先生の講義の日だけ都合がつかなかったし、それどころか、同じ研究室に属し、同じ学会の会長であられた先生に、これまで一度もお目にかかったことがないとなれば、私の不精もかなりのものである。

しかも、その著作からは圧倒的な影響を受け続け、勝手な思い入ればかりが強くなっていたから、気後れのあまり身が固まっていたのだろう。お宅を訪ねる前はたいそう緊張し、同席してくれる院生たちと「作戦会議」を開いて、計画を練ったりした。もっとも、そのとき私は、気後れの反動なのか、少し「戦闘的」な気分になっていて、先生の思想の矛盾を暴き出すとでもいうような、勇ましいことを考えていた。

ところが、お目に掛かったとたん、そんな「勇ましき」などまるで滑稽、先生ご自身が、ご自分の矛盾を洗いざらい、私たちの前に並べてくれていた。「教育の誘惑」の話など、まさにその典型。教えることによって相手を良くしようとする、その発想こそ誤っている、と何度も言いながら、しかし先生ご自身は、やはり「教えたくなる」。そして、そうした自分に気づいては、あらためて危険を自覚し、教育の誘惑の危険について語り直しているうちに、また「教えたくなってしまう」。それに気がついて、また、……。揺れ続け、迷い続け、その姿をそのまま、私たちに語って下さったのである。

当初、私たちの目論みは、先生の「生命観の背景」を聞き出すことにあった。「種の持続としての教育」という発想以来、先生の思想は、その中心点を「人間」から「生命^{いのち}」に移している。あるいは、その二つの中心点を持った微妙な（矛盾を孕んだ）楕円形になっている。そう考えた私たちは、子どもの頃の遊びから話を始め、理論になる以前の原初的な自然の風景の内に、先生の生命観の出自を見出す「作戦」を立てていた。

しかし、実際のライブの場において、そうした小賢しい作戦が通用するはずがない。まして、八十六歳にしてキラキラと目を輝かせて話を続けてくださる先生の、その語りの流れを途中で遮るなど、誰にできようはずもなかった。

「ロハ台」の頃を語る先生はベランメエ口調になり、「紛争（闘争）」を思い出す先生は沈んだ声になっ

た。既に活字で知っていたはずの話も、そうした語りの中では、生き生きとした勢いを取り戻して私たちの耳に飛び込んできた。「その気になる」話も、「生命の多様性」の話も、それこそ何度も読んでいたにもかかわらず、その母胎の元で語られるとき、傷つきやすい（思わず手を差し伸べたくなるような）生々しさを回復し、私たち聴く者を虜にした。教科書裁判を「学問の自由」ではなく「アーティストの自由」として闘うべきであったと、そう話されたと

きには、驚きと嬉しさのあまり、思わずこぶしを握り締めていた。

こういう「おじいさん」の声ならもっとみんなに聴いてもらいたい。我が身の非礼も省みず、そんな勝手なことを考えている。

当日、同席したのは、助手の吉長真子氏のほか、院生の青柳路子、杉原徹、野見収、松尾憲一の諸氏。テーブル起こしは波多野名奈氏が務めてくれた。